



# ありあけ

●発行日 2010年6月1日  
●編集 会報編集委員会

●発行 佐賀大学農学部同窓会  
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700  
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp  
ホームページ http://dousou.saga-u.ac.jp/

## キャリアデザイン講座で水田和彦さん 神崎夕紀さんが講話



平成17年から全学部の2～3年生を対象に開催されているキャリアデザイン講座を、昨年度は佐賀県立佐賀農業高等学校校長の水田和彦さん（S51年卒・農業機械学）と、キリンビール株式会社杉木工場醸造担当部長の神崎夕紀さん（S61年卒・生物化学）のお二人に担当していただきました。

### 目次

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアデザイン講座で水田和彦さん<br/>神崎夕紀さんが講話..... P 1</li> <li>・退職教員からのメッセージ..... P 2～3<br/>（田代洋丞先生、瀬口昌洋先生、田中 明先生）</li> <li>・研究室紹介..... P 4<br/>（応用生物科学科 蔬菜花卉園芸学 研究室）</li> <li>・農学部と同窓会の意見交換会..... P 5</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・農業版 MOT について<br/>内海特任准教授に聞く..... P 6</li> <li>・会員の広場..... P 7～9<br/>佐大への提言（Ⅳ） 平山 伸氏</li> <li>・会員の情報（博士号取得）..... P 9<br/>野見山敏雄氏、原 樹氏、國武久登氏</li> <li>・支部だより..... P 10<br/>東海支部、佐賀県庁支部、鹿児島支部</li> </ul> |
|--|--|

## 退職教員からのメッセージ

38年間で  
振り返って

田代 洋丞

( 蔬菜・花卉園芸学、細胞工学 )

農学部同窓会の皆様にはお元気で御活躍のことと拝察致します。私は本年3月31日に定年により退職しました。1972年4月に園芸学科蔬菜・花卉園芸学講座の助手として赴任して以来の38年間は、あっと言う間に過ぎたようにも感じますが、振り返ってみると、充実した日々であったと思います。

若い頃は、学生と一緒によく学び、よく遊びました。ゼミの準備のために当番の学生と深夜まで英語論文を解説したり、卒論生や修論生と土日抜きで実験をしました。また、暇を盗んでは、郊外の川でジョウやザリガニを捕まえたり、蓮根堀の食用ガエルを釣ったりしました。獲物は、煮付けや天ぷらにして、皆のお腹に収まりました。

学生と一緒に10年間続けた「ワケギの起源に関する細胞遺伝学的研究」の成果により、私は1983年に博士の学位を授与され、1985年に園芸学会賞をいただき、1986年に助教授任になりました。さらに、1987年4月から半年間海外へ出張する機会を与えられ、オランダのタマネギ研究プロジェクトに参加しました。私の役割はタマネギの遺伝子組換えに必要な再分化系の確立でした。佐賀大学でネギ属植物の組織培養を行っていたので、方法上の問題はありませんでした。17時頃になると研究所の職員は帰ってしまい、19時には研究棟の出入り口が閉鎖されてしまうのです。土日は休むものと決まっていた。佐賀大学では時間にとらわれずに研究をしていた私

としては、時間の観念を変え、生活を考え直す必要がありました。そして、このことは私が家族共々オランダの生活を楽しむとともに、大いに見聞を広げる機会を与えてくれました。

1988年4月に農学部はそれまでの4学科(農学科、園芸学科、農業土木学科、農芸化学科)を改組し、2学科(生物生産学科、応用生物科学科)を設置しました。蔬菜・花卉園芸学講座は種苗生産学分野と細胞工学分野の二つに分割され、宮崎貞巳教授が前者を、私が後者を担当することになりました。同年には連合農学研究科博士課程の学生を受入れることが可能になったこともあり、私達の研究は大いに進展し、その成果をまとめた論文は国内外の著名な雑誌に掲載されました。そして、細胞工学分野で研究に励んだ学生の中から3人(執行正義君、山下謙一郎君、ファム・テイ・ミン・フオンさん)が園芸学会賞を授与され、さらに、その中の1人(執行正義君)が日本農学進歩賞を授与されたことは、私の大きな誇りとなっています。

2006年4月に農学部はそれまでの2学科を改組し、3学科(応用生物科学科、生物環境科学科、生命機能科学科)を設置しました。種苗生産学分野と細胞工学分野は統合され、宮崎教授の後を継いだ一色司郎準教授とともに再び蔬菜・花卉園芸学を名乗ることになりました。しかし、私は2007年4月に教育・学生担当理事・副学長を命ぜられたため、その後は学生と一緒に学び遊ぶ時間がないままに定年を迎えることになってしまいました。

農学部は今後も変革をくり返しながら発展して行くことでしょう。私は、農学部で出会い、共に過ごした皆さんに心から感謝しています。今後は皆さんのご健勝をお祈りしながら、農学部の将来を見守りたいと思っています。

教員生活30年間で  
振り返って

瀬口 昌洋

( 浅海干潟環境学分野 )

この3月末日をもって約35年間の教員生活を無事閉じることが出来ました。私の教員生活の大半である約30年間で、この佐賀大学農学部で過ごさせて頂きました。この間、諸先生方の御支援と御協力を得て、大過なく、また思う存分に教員生活に集中出来

たような気が致します。心より深謝申し上げます。

一方、私の研究室に所属してくれた多くの卒業生の皆さんは、意欲的かつ主体的に卒業研究に励んでくれました。この拙文を記しているときも、卒業生一人一人の顔と思い出が走馬灯のように浮かびました。私の人生の宝でもある、多くの思い出を残してくれた卒業生の皆さんには、心より“ありがとう”と申し上げます。

私は、昭和50年6月に農業土木学科干拓水工学研究室に赴任しました。当時、この研究室には渡辺潔先生(名誉教授)と藤本昌宣先生(名誉教授)が居られ、六角川河口堰の建設に係わる有明海奥部沿

岸域の現地調査や有明粘土の圧縮試験などを実施されてきました。私も、度々、早朝から夕刻まで、この現地調査に参加しました。しかし、特に私が助手時代に集中的に取り組んだ仕事は、有明海の大型水理模型実験装置（水平縮尺：4千分の1）の製作でした。日々の努力の甲斐あり、約3年間の歳月を費やして、何とか、この実験装置の完成に漕ぎ着けました。この実験装置による多くの実験から、有明海奥部の複雑な潮流構造と粘土などの浮遊性物質の輸送や底質環境との関連性などを究明することが出来ました。

その後、昭和55年4月から約5年間の他大学での勤務の後、昭和60年1月に急遽、再び農学部付属施設である浅海干潟総合実験施設（現在の農学部3号館の建物）に着任することになりました。この実験施設では、度々現地調査を実施し、干潟域の潮流と底泥の巻上げやゴリとの関連性について検討しました。この実験施設は農学部本館と離れて位置し、また実験施設の西側にはグラウンドが広がっていた

ため、この立地を利用し、比較的ノンビリかつ集中的な学生生活を送ることが出来たような気がします。

さらに平成5年には、実験施設の廃止に伴い、生物生産学科に浅海干潟環境学分野を新設し、ここに移りました。その後、新築された農学部4号館への研究室の移転や平成18年の学科改組に伴う生物生産学科から生物環境科学科への転属などを経て、この3月末日に教員生活を無事終えることが出来ました。私の過ごした、この30年間の後半は、正しく大学にとって大きな変革の時代であったような気が致します。その最たる出来事は、平成16年の国立大学法人化でした。また、近年の農学部への女子学生の進出と活躍も大きな変革の1つと言えるかもしれません。

教員生活を終えるに当たり、改めて農学部の教職員と同窓会の皆様方に御礼を申し上げますと同時に、農学部のますますの発展と皆様方の御健勝、御多幸を心よりお祈し、退職に際してのご挨拶とさせていただきます。



## 虹の松原のこと

田中 明

（農業土木学）

農業土木先進地佐賀県で教育・研究活動が出来たこと、また「虹の松原」に関わることが出来たことで私としては十分に満足できた佐賀大学での生活でした。これもひとえに皆様のご理解とご支援によるものと感謝し、お礼を申し上げます。

虹の松原の現状と今行われていることを紹介します。

1. 全国の松原では、(1)松くい虫による被害が深刻で適切な防除を行わないと全滅する恐れがある、(2)燃料としての松葉かきが行われなくなったことで自然の遷移が進み広葉樹林化している、ことなど共通の問題が生じています。何も対策しなければ松原は確実に消滅し、松原が持つ防災機能が失われるばかりでなく、白砂青松の風景も失われていくと予想されています。虹の松原では松くい虫防除効果により被害は少なくなったものの、広葉樹の侵入や草本類の繁茂によって特別名勝としての景観の低下が危惧されています。

2. 平成19年9月に九州森林管理局佐賀森林管理署は防災機能の維持、松くい虫防除、特別名勝の景観保全の観点から「虹の松原保全・再生対策調査報告書」を策定し管理計画の基本的な方針をまとめまし

た。この方針が特徴的であるのは防災機能の維持のみならず、景観的な価値の保存・再生が目的にあげられていることです。内容を一言で表すと、百年かけても白砂青松の虹の松原を再生しようとするものです。ちなみに虹の松原は昭和30年に「松浦湾ノ弯曲自ラ弧状ヲ成セル海洋線二連リ青松白砂ノ一帯唐津浜崎両町竝鏡村二亘レルモノナリ、海岸線ノ形虹ニ似タルヲ以テ其ノ名ヲ負フ - - 枝柯根幹盤屈 趣ヲ成セルモノ多ク - - 」という理由で、国内の松原で唯一特別名勝に指定されています。

3. 関係行政機関は松くい虫防除を行うとともに広葉樹を除去し、市民は松葉かきと除草作業をし、行政と市民の協働作業が進行しています。長期的な景観の変化については不明なことがありますが、現在のところ、次のような将来像を目標とすることで合意しています。(1)広葉樹やマツの過密林が伐採され、松原全域がマツの単層林の状態となっている、(2)市民による松葉かき、除草等が実施され、松原全体が「白砂青松」の状況に近づきつつあり、松露の発生が観察できる、(3)レクリエーションや森林浴・海気浴など休養のフィールドとして、また植物の観察会や環境教育の場として活用がなされている。また広葉樹の伐採、除去作業がビジュアル的に実感できる「景観保全モデル林」及び健全なマツ林の維持のための除間伐を進めるための「密度管理モデル地区」が設定されています。

今後とも佐賀大学及び海浜台地生物環境研究センターが虹の松原の保全・再生活動に関わって欲しいと思います。

## シリーズ⑤ 研究室紹介

# 応用生物科学科 蔬菜花卉園芸学 研究室

本研究室では、野菜や花の品種改良のための研究と教育を行っています。平成22年4月の時点でスタッフは、私、一色司郎（准教授）、竹下昭人技術職員およびモハマド ミザヌル ラヒム カーン産学官連携研究員の3名です。（平成22年3月に、田代洋丞教授が38年の在職期間を経て定年退職されました。）学生は、博士課程1名（バングラデシュ留学生）、修士課程2年3名および1年2名ならびに学部4年7名および3年4名の総勢17名が所属しています。

現在取り組んでいる主な研究テーマは、野生種を利用したナスの品種改良に関する遺伝・育種学的研究です。ナスは、トマト、ピーマン、トウガラシ、ジャガイモなどと同じナス科の重要な野菜で、そのふるさととは、熱帯アジア、インドであると推定されています。また、ナスには遺伝資源として重要な近縁野生種が多く存在し、それらはアジア、アフリカ、南米など世界中に分布しています。



ナスの野生種の一つソラナムエチオピクム

これまで、ナスの野生種は、耐病性等の付与のための台木として利用されるか観賞用植物として利用される程度でした。しかし、当研究室では、野生種とナスとの間で交雑を繰り返すことで、ナスの細胞質を野生種のもので置換したナス細胞質置換系統を作出した結果、ナスの雄性不稔系統の育成に成功しました。雄性不稔と



さまざまなナスの果実

は花粉ができないあるいは葯から花粉を放出しない性質等を言いますが、この雄性不稔系統を利用することで、種無しの高品質ナスの生産やF<sub>1</sub>品種の種子生産の効率化が図れます。当研究室で育成した雄性不稔系統は海外の種苗会社等から引き合いが来ており、本系統を利用したナスの新品種が世界のマーケットに出回るのもそう遠くない将来に実現しそうです。



雄性不稔のナスの花

ここ数年の卒業生の進路は、JA、佐賀県職、種苗会社、福岡県警、食品会社、銀行、大学院進学などで、幅広い分野に学生が活躍の場を求めていることが感じとれます。佐賀大学ご卒業の諸先輩方に、卒業生が何かとお世話になることも多いかと思いますが、よろしくお取り計らいいただければ幸いです。

一色 司郎

# 農学部と同窓会の意見交換会

## ～ 農業版 MOT ( 農業技術経営管理士 ) について ～

昨年12月10日(木)、佐賀市の「グランデはがくれ」において、今回で第2回目となる意見交換会を開催しました。農学部からは、野瀬学部長、和田副学長、光富副学部長、鈴木学科長、井上学科長、神田学科長に御出席いただき、同窓会からは松尾会長はじめ8名の役員代表が出席し、野瀬学部長の話題提供のあと意見交換を行いました。

野瀬学部長からは、平成21年4月に、高度な専門職業人の養成を目的として改組された大学院農学研究科修士課程の概要や経済学部と連携した履修モデル、特に、今回の改組の中で目玉の一つになっている、農業版 MOT ( 農業技術経営管理士 ) 養成の背景や社会的なニーズ等について、

- ・ 農業経営の法人化や農業への企業参入が進む中で、農業版 MOT コースは、農業法人の経営者・指導者をはじめ、アグリビジネスの指導者、アグリベンチャービジネスを立ち上げるような者の育成を目指している。学生を対象に正規のコースとして組み入れられたのは、全国の国立大学の中で佐賀大学が初めての取組であること、
- ・ このほかに、社会人を対象として年間150時間履修すると、「佐賀大学農業技術経営管理士」の履修証明が発行される特別のコースが併設されており、特に、同コースはマスコミの報道等の影響も

あって、具体的な履修内容や大学院への入学等について問い合わせも多く注目されていること、などの話題提供をして頂きました。

話題提供の後、同窓会に対して何が求められているのか、どのような協力ができるのか活発な意見交換が行われ、

- ・ 実際に農業経営を行っている法人やベンチャーの方の具体的な事例に基づいて、演習形式での講義や現地研修を行うことになれば、そうした経営者のリストアップ等について同窓会として協力が出てくるのではないかと、要請があれば農業団体としても協力したい、
- ・ 今後、農業版 MOT が具体的に進んでいく中で、特任准教授として就任される内海修一さん(47農経)を通して協力できるのではないかと、
- ・ 農業技術経営管理士となった方が実績を積んで社会的にも認められ、権威付けが高まるよう、同窓会としても長い目でバックアップしてほしい、
- ・ 同窓会員の皆様にも、こうした取組を周知して情報の提供や協力をお願いしていきたい、などの意見が出されました。

このほか、海浜台地生物環境センターの再編統合や22年度が節目となる農学部の公開シンポジウム、佐賀大学と三瀬地域との連携した取組等についても情報提供や意見交換が行われるなど、農学部と同窓会との連携・協力が更に深まるような有意義な意見交換会でした。



# 農業版 MOT について 内海特任准教授に聞く



今回、農業版 MOT 担当の特任准教授にご就任され、おめでとうございます。まず感想と抱負を・25年ぶりに大学にお世話になることになり（注）大学の環境変化はもちろん先端的な研究や教育の推進、また東アジアを中心とした活発な国際交流や多様な地域貢献活動の展開など、私たちが学んだ時代に比較し、いろいろの面で大きく変化しているというのが第一印象。

今回、農業版 MOT 教育の推進に関わることになり、責任の重さを感じています。これまで研究・普及・行政で経験したことや、現場で出会ってきた多くの生産者の生の声や大学に対する期待等を MOT 教育の推進に生かし、「大学と現場との橋渡しの役割」を果たせればと考えています。

## 全国でも珍しい農業版 MOT が開設されたが、 コースの特徴は

・このプログラムは文部科学省の大学院 GP に採択されたもので、大学院教育の実質化と国際化の推進が狙い。大学院農学研究科の改組に合わせて、今年4月から新たに副コースとして農業技術経営管理学コース（農業版 MOT）を設け、修士課程の学生を対象に、応用農学と経営科学、及びケース分析演習などを学び、高度な農業技術経営管理者を育成していくものです。

農業を取り巻く環境が国内外ともに大きく変貌する中で、将来の変化の方向を見通し、技術のあり方や戦略的な意思決定、経営のマネジメントなどを実践・指導しうる人材がこのコースから育っていくことを期待しています。

## 社会人の養成講座も開設されたが

・大学院の副コースに併設して社会人の「農業技術経営管理士育成講座」を夜間に開設し、1年間かけて生産技術関連の科目や経営経済関連科目を履修するとともに経営情報処理分析演習やケース分析演習、修了研究等に取り組んでいます。応募者がどのくらいあるか予測がつかなかったが、佐賀県のみならず九州各県から約70件の照会があり、最終的に定員10名程度に対し45人の応募があって12名が入校されました。関心の高さに驚いています。また農業者以外に食品産業や金融、建設業、JA・県普及指導員など、新しいビジネス展開を目指す人が多かったことも特徴です。

## 農学部同窓会としても今後の発展を期待しているが、今後の方向について

・MOT 推進については、各界各層で活躍されている同窓生の方々にいろいろの面でお世話になることと思いますが、この取組を通して大学と農学部同窓会との連携がさらに強化されるとともに、MOT で学んだ学生や社会人の方が、地域農業の牽引者や新たなビジネス展開の担い手として活躍してくれることを期待しています。

（注）内海修一先生は、昭和47年に佐大農学部の農業経済学専攻を卒業されて、10年間農学部勤務後、佐賀県庁に入られ経営専技、農業政良普及センター所長、農業試験研究センター所長を歴任され、日本政策金融公庫を経て本年2月に特任准教授に就任されました。

## 農学部同窓会の動き



就職ガイダンスは、農学部と同窓会の取組みとして就職を前にした3年次生を対象に平成16年から実施しております。

昨年は就職が厳しい中、伊藤ハム九州人事課の堀 遼平さん（H19年卒・生物生産学科）、JA福岡市の吉田晴香さん（H19年卒・生産システム情報学）、長崎県農林技術開発センターの福田伸二さん（H7年卒・植物ウイルス病制御学）、それに山崎パン福岡工場人事部から各々就職指導をしていただきました。

# 会員の広場

## 佐大への提言（Ⅳ）

横浜市 平山 伸

（S60年卒・生物化学）

数年前まで佐大をはじめ国内外の大学へ行く機会を得た経験から、佐大の更なる活性化のため外から見た佐大について感じたことを紹介する場として本誌3号から寄稿させて頂いているが、各方面からご意見も寄せられ、議論する内容として認知されつつあることは望外の喜びである。今回は4回目であるが、初めて読まれる方は本誌3号からお読み頂ければ幸いである。

### 1 スポーツ施設の雨天対策

雨天が多い九州ではスポーツ施設の全天候型化や、水はけカイゼンはスポーツ文化を支える視点として重要と考えられる。具体的にはグラウンドの水はけを良くすること、あるいは屋内型のテニスコート等の設置が必要ではと感じる。水はけを良くする一つの手法としてグラウンドへの天然芝導入も考えられ、宮崎大学では導入済みである。なお、2008年12月26日のテレビ朝日報道ステーションにて鳥取方式の安価な天然芝生の製造法が紹介され、鳥取県のHPにも関連のサイトがあり、これらから推測すると年間維持費は100円/㎡以内である。

佐賀県内においても、三田川小学校や東脊振小学校で校庭の芝生化が実現し、約7千平方メートルにポット2万5千個（約70万円）を植え、維持管理を含め100円/㎡で推移しているとの報道である。詳細は2009年9月23日の佐賀新聞を参照にされたい。また、佐賀県の平成21年度校庭芝生化モデル事業報告会が2010年2月17日に開催されており、これらの情報も参考になろう。

芝生は地域の市民を呼び寄せる魅力を併せ持つため、地域と共に発展する大学を目指す佐大の検討項目の一つとして取り上げられることを期待したい。

### 2 芸術的視点を加えたキャンパス造りによる芸術系大学の鮮明化戦略

近年の佐大を見ていると、理工学部1号館1階に地域連携デザイン工房が設置され、都市工学科による街並みデザインの展示会が開催されている。他にもキャンパス内緑地での美術工芸品の屋外展示、及び平成20年度質の高い大学教育推進プログラム「創

造的人材育成～誰でもクリエイター」におけるデジタル表現技術者養成の実施等、これまでに無いデザインに関する新しい活動が次々と展開されている。これらをより恒常的に鮮明化し、初めてキャンパスを訪れた人がまた来たくなるようにするために、モニュメントの設置や案内板の更なるお洒落感の演出をしてはと考える。一例として、東京大学と佐大の藤棚を比較する（添付写真参照）。東京大学の藤棚はお洒落感の演出が施されているが、残念ながら佐大の藤棚にはその視点が見受けられない。

一方、各地での美術展示会や首都圏の大手百貨店での芸術作品展示会で文部科学大臣賞受賞者等の著名なOBの作品が高価な価格で販売されている実績は、正に国内トップレベルの芸術家を輩出している拠点大学になっているといえる。しかし、その雰囲気は本庄キャンパスや鍋島キャンパスに恒常的に感じられないことが、ミスマッチを感じる源泉である。

例えば、大学法人が設置するモニュメントのデザインを募集し、学生やOBが応募する形態も考えられる。また、デザインや芸術・美術系学生のコンクール受賞作品等から学内での選抜会を開催し、優勝作品を毎年1点、学内に永久的に展示することも想定され、これらの取組みにより学生へのモチベーションアップと大学の特色出しの両立を図られるものと考えられる。目指すは、佐大キャンパス風景を画材に多くの市民がキャンパスに絵を描いたり、佐賀城内の「彫刻の森」のようにキャンパス内のアートを巡る空間を創造することである。なお、キャンパスの風景を画題に市民が賑わう事例は一橋大学で顕著であり（添付写真参照）一橋大学キャンパスで多



東京大学の藤棚



佐大の藤棚

数の市民が季節ごとに絵を描く風景は、大学が真に市民の憩いの場として市民に愛される大学になっている証と言えよう。



一橋大学の市民スケッチ風景

### 3 日本酒研究センターの設置

佐賀県は鍋島直正公（閑叟公）の酒造奨励の流れを汲み現在でも酒造りが盛んで、製造された日本酒（地酒）は、官民の品評会で受賞も多く、最近では米国などにも輸出されている。佐賀県の地酒開発にはこれまで佐賀県工業技術センターが主導的な役割を果たし、本誌ありあけ3号で紹介された博士号取得者の方のご尽力も大きい。一方、大型企業誘致に成功し佐賀空港の東京便が増便された佐賀県では首都圏との交流人口の増大が容易に想定されるが、佐賀県の飲食店では地酒に関する意識が高いとはいえ、潜在需要とのミスマッチが大きい。現に首都圏では佐賀出身ではない人で構成される佐賀の地酒の愛好家クラブがあり、年に数回佐賀県の蔵元巡りを実施している。また、佐賀新聞社刊「津屋英樹著 肥前の町から」・「同 新肥前の町から」でも首都圏から佐賀に赴任して来た人が、薫り高くコクの有る地酒の魅力を伝えている。首都圏では北日本で造られた水のようなサラリとした酒が多く、佐賀のコクの高い酒を初めて飲んだ人は酒の概念がガラリと変わり愛好家になる様は先に紹介した佐賀の地酒愛好家クラブのメンバーからも異口同音に聞く感想である。即ち、これらの魅力が一部の日本人と米国・ニューヨーク等しか伝わっていないのが現況である。

そこで、これらの地場酒造産業の更なる活性化を目指し、日本酒研究センターの設置を提案したい。酒に合った新たなお米の開発、新たな酵母の探索・機能評価、日本酒の発酵残渣の有効利用、発酵成分の栄養化学的評価、酒類摂取による健康維持解析評価等、栽培から日本酒製造や副産物の有効利用まで研究要素も多いと予想される。特に新たな酵母の探索源として渡り鳥が国内最大規模の有明海は世界中の微生物が生存・集積している可能性を有し、新種の酵母の取得に期待が持たれる。なお、2009年5月12日佐大・菱の実会館において福岡国税局支援のもと農学部学生を対象に醸造学講座が開催され、佐賀県工業技術センター主導にて日本酒の歴史やきき酒の講義が開催されたことが各誌で大きく報じられたことは、大学として日本酒研究が活発化してきたも

のと考えられる。ちなみに、山梨大学では国内唯一のワイン科学研究センターがあり、原料となるブドウの品種改良から発酵までの研究を実施しており、これらの取組みは参考になろう。また、幸い2009年1月31日の佐賀新聞によれば佐大は酒類の試験製造免許を取得したことが報じられており、日本酒、焼酎、バイオマスエタノール等の新たな開発が期待できる。更に、嗜好品である日本酒、焼酎は地域のシンボルでもあり、佐賀大学で開発されたお酒を軸に有田焼、唐津焼、志田焼、白石焼等の酒器や雛祭り等のイベントとのコラボレーションが想定され、地域ブランドの更なる確立に寄与できるものと考えられる。

### 4 見える化による学生のモチベーションアップ作戦

製造業ではトヨタ等で実施しているカイゼン活動や見える化活動が盛んで、厚生労働省でも大臣室にて見える化が実践されている。これらの取組みをヒントに、国家公務員第一種合格者、弁護士、弁理士、公認会計士、ベンチャー企業創出数等をグラフ化して学生センターなど、学生が集まるところに掲示し、学生のモチベーションUPを図ることを提案したい。このような学生の見本となる事例は、一部の大学職員、教官、OB等に情報が埋もれており、大学の主役である学生に伝わりにくい環境にある。特に、大部分を占める学部学生は4年で入れ替わるため情報が伝授されにくく、これらを掲示・見える化して情報を共有化していくことが学生のモチベーションUPに直結すると考える。また、留学生が多い佐大の日本人学生の留学モチベーションUPとして、留学者数や佐大留学経験者が就いた大学一覧等を見える化するのも面白い。

更に、これまで、佐大にて講演されたOBや著名人の記録をデータベース化し、かつビデオに収録して学生が随時閲覧できるよう整備することは、学生のモチベーションUPに繋がるものと考えられる。特に各種講演会は準備段階を含め多大な準備業務が費やされていることが予想され、その結果開催された貴重な講演会を何回も活用できる体制の構築は大学の資源を有効活用していく視点からも価値があるものと考えられる。

### 5 サークル活動への資金援助の強化

インターネットが普及し、ややもすると人と人との直接的なコミュニケーション能力不足に陥ると云われているが、この解決手段として、サークル活動

の活発化が挙げられる。私自身も学生時代には、その後廃部になった「生物研究会(生研)」というサークルにて活動し、有明海の渡り鳥の調査をはじめ、石谷山、鹿島中川、馬渡島等の佐賀県各地の鳥類調査も経験した。これらサークル活動で知りえた人とのつながりは、卒後四半世紀以上経っても継続し、サークル活動に熱心な人は、卒業後に活躍されている人が多い印象を持つ。例えば私が所属していた生研では、虹ノ松原のマツの本数や大きさ等を調査し植物の知見を磨き、現在宮崎大学教授でNHK趣味の園芸の講師としても活躍されているK氏、資生堂で社長賞を受賞された現K夫人、ホンダでエンジン開発に従事するN氏、佐賀県の高校で熱心な教育を展開しているS氏、佐賀県のロッククライミングを親子で牽引しアジア No.1 の記録を残すH氏、脱サラし新たな農業を展開しているO氏、N氏等、更に先輩には、本誌「ありあけ」にも登場された農学部教授A氏や花王で先端の研究をされ複数の大学で講師を務めるY氏も居られ、実に多士多彩である。時代の流れで廃部や新しく誕生するサークルもあるとは考えられるが、少なくとも生物の宝庫・佐賀県の生物にスポットを当てたサークルがなくなっている

ことは寂しい限りであり、例えば環境生物評価の視点として佐賀環境フォーラム等から、本格的な研究題材と共に、サークル活動として新たな展開が生まれることを期待したい。

一方、現在の佐大を見ていると、大学祭での展示発表会が減少しサークル活動が以前より衰退しているのではとの危惧を持つ。その一つの要因としては、サークル会館の手狭さもあると推測される。個々のサークルには現状より広い部室を提供し、サークルで所有する資材の置場拡充も必須と感じる。更に、就職活動の視点からサークル活動を見ると、企業の人事担当者は、評価が同程度の複数の候補者から採用者を決定する場合には、サークル活動経験者を優先して採用する傾向は強い。即ち、サークル活動においてコミュニケーション力や所謂人間力が育成されていることを評価するものであり、このことは現役の学生にも強く訴えたい。

いずれにせよサークル活動の推進は人間力UPと共に就職時の自己PRにも直結するので、社会性教育支援の一環として新たなサークル活動の立ち上げ資金やサークル会館充実に同窓会がバックアップすることも視野に入れては如何だろうか。

## 会 員 の 情 報 (博士号 取得)



**野見山敏雄さん**  
(S54年卒・育種学)

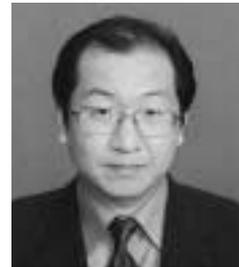
- ①産直流通の諸形態と展開条件に関する研究
- ②博士(農学)
- ③東京農工大学(1995年)
- ④本研究では産直流通に注目し、その形態を発生史的に分類し、発展の障害になっている数量調整、品揃え、価格形成の問題に限定し、事例を横断的に分析・検討を行った。
- ⑤東京農工大学大学院農学研究院・教授



**原 樹さん**  
(S60年卒・生物化学)

- ①イエバエ蛹に存在するフェノールオキシダーゼの特性に関する研究
- ②博士(農学)
- ③鹿児島大学
- ④イエバエの変態や生体防御に重要な役割を果たしているフェノールオキシダーゼを酵素化学的に解析した
- ⑤久留米大学医学部感染医学講座真核微生物学部門

学位論文名	取得学位
学位授与大学名	学位論文の概要
現勤務先	



**國武 久登さん**  
(S61年卒・果樹園芸学)

- ①園芸植物のプロトプラスト培養とその育種の利用に関する研究
- ②学術博士
- ③千葉大学(平成3年)
- ④プロトプラスト培養は細胞融合などの細胞工学的な育種を行うにあたり、重要な技術である。そこで、カンキツなどのいくつかの園芸植物において、カルス、植物成長調整物質、糖などの種類や量を検討することにより、ユニバーサル培地の開発の可能性について検討した。
- ⑤宮崎大学農学部教授

# 支部 だより

## 佐賀大学同窓会東海支部 (不知火会) 総会開催

隔年で行っている佐賀大学同窓会東海支部(不知火会)の第19回総会が、11月29日(日)名古屋市の名鉄ニューグランドホテルで開催された。

本部から久間同窓会長、松尾農学部会長ら4名を含め18名の出席がありました。

初めに林支部長が挨拶し、本部の久間会長をはじめとする4名の来賓から大学の近況が報告されました。

人数こそ少ないもののひと通りの各学部からの参加があり、東海地区における支部の存在を認識することが出来、とても有意義な総会となりました。



恒川 幹司 (S59年卒・畜産学)

## 「先輩を送る会」を開催

佐賀県庁支部では、去る3月16日に佐賀市の「グランデはがくれ」で平成22年3月末をもって退職される5名の「先輩を送る会」を開催しました。

今回は、永年にわたり佐賀県の農業や農村の振興・発展に大きく貢献されてこられた松崎正文様(S47年 病理専攻)、角 博様(S47年 土肥専攻)、石川富美夫様(S48年 作物専攻)、小笠原康人様(S48年 干拓専攻)、片倉輝久雄様(S49年 干拓専攻)が県庁を退職されました。

当日は、「佐賀県庁支部」の旗の下、先輩方を囲んで会員約100名が県庁生活の思い出や苦労話を伺うなど、楽しい一時を過ごさせていただきました。

先輩の方々には、今後とも私たちに対し、ご指導・ご鞭撻をお願いいたしますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



式町 秀明 (S54年卒・農学科畜産学)

## 佐賀大学同窓会鹿児島支部同窓会の開催

平成22年1月30日鹿児島の天文館の夜、「久しぶり!お元気ですか?」「初めまして!」の挨拶がかわされました。嬉しいことに今年の参加者は総勢20名を超えました。

当日は同窓会本部から久間会長をはじめ6名の方が佐賀から、また鹿児島県会員は昭和29年文理・法律卒の竹下 威顧問から平成5年理工・化学卒の戸床恭子さんまで幅広い年齢層の16名、総勢22名が参加となりました。



支部会は久間会長による佐賀大学の現況報告、上田耕平支部長(昭和39年文理・物理卒)の挨拶で開始。ところが、乾杯をお願いしていた竹下顧問が仕事の都合で出席が遅れ、急遽、本部から参加された宮嶋副会長に乾杯をお願いするハプニングがありました。かえって大いに盛り上がる乾杯になりました。

その後、一人持ち時間3分という時間制限の中、自己紹介に移りました。参加者は教育・経済・理工・農学部から文理学部にわたっていますので、自己紹介も出身学部を反映した個性的なものでした。

最後は、一番若い戸床恭子さんの挨拶で、再会を約束してお開きとなりました。

支部会の参加者は同じ空間で学生時代を過ごしていますので、大学時代の話になると同じ大学生に戻り年齢差を感じることはまったくなく、これも同窓会ならではの感覚ではないかと思いました。

西村希志子 (S52年卒・植物病理学)

## 事務局から

小池勝氏(昭和28年農学科農芸化学卒)は平成21年12月20日急逝されました。故人は、大学卒業後鹿児島実業高校を皮切りに県立高校や龍谷高校で教鞭をとられてきました。先日、故人の奥様から農学部同窓会に寄付金を賜りました。

心からご冥福をお祈りします。



## 編集後記

本年3月ご退官された田代先生、瀬口先生、田中先生にはお忙しい中、ご寄稿いただきました。心から感謝申し上げますと共に、先生方の今後のご健勝とご活躍をお祈りします。

なお、田中先生には、本文にあったように虹の松原保全活動が評価され、環境省の「みどりの日」自然環境功労者として大臣表彰を受けられました。(K)